

---

# Physical Graffiti

浮浪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Physical Graffiti

### 【Nコード】

N0178F

### 【作者名】

浮浪

### 【あらすじ】

今までの人生はみんな嘘だ。本間は人生を変えるため、これまでの屈辱を払拭するために、東京の地で歩き始めた。右手でギターをかつぎ、左手に自尊心を握り締めて。

## Monday Morning

カーテンの隙間から差し込む陽光と、すずめのほがらかな鳴き声が爽やかな朝の到来を告げている。

本間はカーテンをぴつたりと閉めなおし、すずめを罵倒するとベッドに潜り込んだ。

少しでも寝ておかねばいけない。第一印象で元気なさそうとか、暗そうなんてレッテルを貼られたらたまらない。

本間の心に一抹の不安がもたげた。今僕はどんな顔をしているのだろう。

本間は枕元に常備してある手鏡で自分の顔を恐る恐る覗いた。

ひどい！！顔の造りではない。いや、もちろん顔の造りもかなりひどいのだが、それ以上に目の下を覆ったくま、自己主張するニキビ、ザラザラするそばかす。顔全体が赤く目の下だけが黒い。不健康な病人に見える。

昨日はここまでひどくなかったのに。

今までの努力ははなんだったんだ。少しでも見たくれを良くしようと、カップラーメンや焼肉を我慢して、まずいほうれん草やピーマンを食し、ビタミン剤だって毎食後飲んだ。それなのになんだこの顔は。

もう休んじゃおうかな。本間の心に弱気の虫が湧いた。

いや、駄目だ。ここで休んだら今までと一緒にじゃないか。本間は小さく雄たけびをあげ、ベッドから起き上がり顔を思い切り叩いた。

今日は、入学式が終わって初めての登校日。学内で行われる出来事の全てが本間にとって初めての経験になる。

初めてクラスメートと対面し、初めておしゃべりをする。そして初めて友達になって、初めての連れション、初めての昼食だ。

本間の頭には授業の選択や単位のことなど頭になかった。あるのは友達、あわよくば女友達を作ること。そして、バンド。

バンドを作ってみんなの前で演奏する事。これが本間の大学生活の目標であり、夢であった。

中学、高校と憧れながら、誰もバンドに誘ってくれなかった。楽器をやっている人間が周囲にいなかったのもあるが、そもそも友達がいなかったのだ。

学園祭で行われる即興で組んだようなコピーバンドを見る度に、本間は歯ぎしりした。

僕の方がずっとうまい。ずっと、ずっと、こんな奴等よりずっとうまいのにと、歯肉から血が滲み出るほどに本間は口惜しがった。

そして妄想した。僕だったら、ラ○クやオ○ンジ○ンジなんかやらない。やるのは決まってるレッドツェッペリンだ。

僕はジミーページだ。本間はジミーページになりきり悦に入る。と

いっても身長170に満たないずんぐりむっくり体型である本間は、ジミーページの体に自分の顔だけ置き換えて夢想するのだ。

曲目はアキレス最後の戦い。ジミー本間は長い腕を振り回してギターをかつびくのだ。

曲の終わりはマスターページの終わりに似ていた。虚脱状態に陥り、自分を惨めに感じる。

自分はジミーページではなく、本間史明。トップに君臨するロックスターではなく、教室の底辺に属する劣等生なのだ。

それでも本間はシコシコシコ練習してきた。ちんこをシコシコすることもたまにあったが、その何百倍もの時間をギター相手にチヨメチヨメしてきた。

その結果、今現在のジミーページでも完全再現するのは難しいと言われるインプロヴィゼーション（即興演奏）を完全コピーするまでになった。

大学は高校とは桁が違う。より多くの友人を得る為。そしてよりレベルの高い音楽をする為にわざわざ本間は東京に出てきたのだ。

## THE BEGINNING (前書き)

始まってしまった大学生活、本間の運命やいかに。

## THE BEGINNING

これが僕のクラスメートなのか。

本間は感慨深く周囲を眺めた。

クラスと言っても、高校などとは違い、あくまで学校側が管理する為のものなのだが、一年時にはクラス対抗球技大会や親睦会などが催される。

それらを説明するためのオリエンテーションの為に、本間を擁する1-Fはある一室に集められていた。

みんなオシャレでスタイリッシュな格好をしている。本間もファッション誌に載っていた通販で上から下まで買い揃えたのだが、なにかが他のクラスメートとは違った。

形は一見同じなのだ。細身のジーンズにダークカラーのタイトなシャツ。インナーにはタンクトップ。

しかしよく見ると、本間が着ている洋服はおかしな点が多々あった。例えばジーパンの尻ポケット部分に施されたチューリップのアップリケ。シャツの胸部分についた用途不明な大きいボタンや斜めに入ったチャック。タンクトップに描かれた風船ガムを膨らませた子供。とにかく unnecessaryなものが多く、とにかくダサかった。

本間は周りと自分を見比べて、初めてそのことに気づいた。

なんなんだ、この風船ガムを膨らませたアメリカナイズされた子供

は。

本間は開いてきたシャツのボタンを全部閉めた。しかし今度はシャツが気になる。

なんでこんな所にボタンが！？こんなところにチャックまでついてる。

本間はすぐさまシャツを脱ぎ捨てた。しかしそうすると、再び風船ガムを膨らませた子供が出てくることになる。

このくそガキが。本間はパニックに陥った。どうしようどうしよう。

本間とはつさにタンクトップを裏返しにした。幸運なことに厚手の生地だったので、風船ガムを膨らませた子供はまったく見えなくなった。

ふう。助かった。本間は大きく息をついた、瞬間、不穏な気配を感じた。

うつ。この感じは！！

本間は周囲を見回した。すると、派手な女学生二人が本間を見て笑っている。

それは本間が長年慣れ親しんできた蔑みの眼差しだった。

彼女たちは自分の一連の行動を見ていたのだろうか？

見ていたに違いない。じゃなければなぜ僕を見て笑うのだ。

本間はお腹を押さえた。お腹が痛いわけじゃない。あくまで演技だ。

あー、お腹痛い。いててててえ。

そう言って、本間教室を出て行った。

教室では女たちの笑い声が響いていた。

「あのチューリップのアプリケうちの母親とおそろなんだけど、  
チヨ―受ける」

「まじで、それやばくない」

ぶひやひやひやひやひやひやひやひやひやひや。

本間はトイレの個室でうなっていた。あくまで演技である。

女たちが男に頼んで偵察させているかもしれないからだ。

本間がうんうんと声に出して唸った。そうしたら間違つて本当に肛門に力が入ってしまったて、便がポロリと出てしまった。

ズボンは履いたままである。

本間はズボンとパンツを同時に脱ぎ、中を確かめた。

零れ落ちた便は不幸なことに粘り気があり、パンツにびっちりと付着していた。

本間は詰まらないようにと願いながらパンツごとトイレに流した。

問題はズボンだった。

ズボンも残念ながら便に犯されていた。チューリップも侵食され、鮮やかな赤色が茶色く濁て、腐った落ち葉にしか見えなくなっていた。

それを見て本間の心は折れた。

もう、帰ろう。

本間の大学生活は前途多難なようだ。

## Good times Bad times (前書き)

構内でウンコを漏らした本間は家に引きこもった、

しかし、そこで本間は終わらない。自分との戦いに打ち勝った本間は再び歩き始める。そして出会った「ロックンロール研究会」

果たして本間に光は差すのか

## Good times      Bad times

本間は震えていた。

本間は悩んでいた。

開けるべきか否か。

いや、開けるべきに決まっている。開けない方がよっぽど不自然だ。  
でも……

怖い。

本間は扉のドアノブを握っては放しを十分以上繰り返していた。部屋の中からグルービーな演奏が聞こえてくる。

かつこいい。本間は素直にそう思った。早く入って近くで聞きたい。

本間はここに至るまでの経緯を思い出し、自分の正当性を確認しようとした。

本間は友人を作る第一の機会を既に失っていた。クラスメイトという一番はじめに接することになる人種とのコンタクトに失敗したのだ。

ウンコのせいで。

先日トイレでウンコを漏らしてしまった本間は、なんとか人目を避

けて、ウンコ漏らしをばれることなく家路についた。まではよかったが、元来の悪癖の一つである被害妄想にとり付かれてしまった。

次の日に大学に行った本間であつたが、胸中穏やかではない。

みんな僕を見て笑っている。ああ、今すれ違った女の子が僕を見てウンコって言った

常識的に考えれば、たとえウンコを漏らしたことを知っていたとしても、露骨に笑ったり、ウンコ呼ばわりする奴は滅多にいないだろう。

しかし、友人と呼べる存在が中高を通して一人もいなかった為、そういう一般的な感性が欠落しているのだ。

へもう駄目だ

絶望に飲み込まれ、本間は自分の部屋へ引きこもった。そこで、本間は葛藤した。

へこのままじゃ、今までとにも変わらない。ずっと一人ぼっちで生きていくのか・・・そんなのいやだ

へでも、誰がウンコたらしと友達になりたいって思うんだ。一緒にいて、ウンコたらされたらどうするんだ

ウワァーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！

苦悩、悶絶。苦悩、死のう。いや、生きよう。本間はどうかこうにか自分との戦いに打ち勝った。

ウンコ漏らしてなにが悪い。おまえらだって子供のころはしょっちゅう漏らしてたじゃないか。笑うなら勝手に笑え。

本間は強くなった。しかし、そこまでの心境に行き着くまでに二週間もの時間を要してしまった。

授業の選択等は母親がわざわざ東京に出てきてやってくれた。

情けなかった。感謝した。変わらなければいけない。本間は強く思った。

大学に行った。クラスごとに行われている英会話の授業に出た。教室の中に知った顔は一人もない。当たり前だ。

他の生徒達はそれぞれグループになって楽しげに談笑している。

本間に話しかける者は最後までいなかった。

落ち込んだ気分であてもなく校内を歩いた。こんなんじゃ駄目だ。そう思つて顔を上げた、その目の前にカオスティックなチラシが貼つてあった。

ジョニーロットンとフレディーマーキュリーがマイクを持って歌っているその後ろで、なんとジョンボーナムがドラムを叩いているのだ。

その上に白文字で

「ロックンロール研究会」

ロック好きな奴らが集まって、語ったり、バンドやったり、イベント

ト打ったりします。

初心者

歓迎。ロック馬鹿集まれ――！！！！！！

連絡先 代表 福部芳郎 090-0000-0000

と書かれていた。

本間の胸は恋する乙女のように、独身イケメン弁護士と知り合った  
独り身三十過ぎ女のようにときめいた。

「これだ。これしかない」

本間は九割九分空白の手帳を取り出して、チラシに書いてある電話  
番号を書き込んだ。

「よし、善は急げだ。早速電話しよう」

本間は全力で家に帰った。携帯を持っていないのを少し後悔した。  
親にいらなかったのかと問われたが断ってしまった。携帯がうんともす  
んとも言わず、孤独を実感させられることを恐れたのだ。

家に着き電話に飛びついた。びくつく手でなんとか番号をプッシュ  
するとすぐに相手が出た。

「はい、もしもし」

遊び人のような軽い口調で福部芳郎が電話に出た。

本間は名前から、眼鏡をした堅い感じをイメージしていたので動揺  
した。

「あ、あああああああの、チラシを見たんすけど」

「あー、はいはい。新入生ね。見学希望でしょ？」

「え、えーと、は、はい」

本間は見学などという行為をするとは思ってもみなかった。

「じゃあ、今週の金曜の三時から俺らが部室で練習してっからきだよ。オッケー？」

「あ、ああはい。オッケーです」

「はい。じゃあね」

「はい、はい。さようなら」

話しが急展開しすぎて、頭がぼやけている。本間はもっと慇懃に規則とか、注意事項とか、今こんなバンドがいますといった説明などを受けると思っていたのだ。

「でも、これで一步前に進んだ」

そう考えると本間は無性にうれしくなった。無意味に飛び上がった、レスポールギターを首からかけて回したりした。そして

「イエーーーーーー！！」とロバートプラントばりにシャウトした。

「そつだ。そもそも僕は約束しているんだ。なにをためらうことがあるんだ」

本間は回想を終えて心が軽くなった。

へなにも難しく考えることはないんだ。ただ、このドアノブを回せば、中で演奏している福部さんが僕を歓迎してくれる」

ドアノブに手をかけ、いざ回さんとしたその瞬間、本間の体は後方へぶっ飛んだ。

「てめえ、いい加減にしろよ、この野郎」

皮ジャンを着たリーゼント頭のごつい男が本間を見下ろし、怒気を含んだ声で言い放った。

本間はなにがなんだか分からずおろおろするしかなかった。

「おまえまじで死にてーのかよ」

リーゼントが拳を突き出して言った。

本間はピンクローターばりの振動で首を左右に振った。



## Face To Face

「てめえいい加減にしろよ。ストーカーサイコ野郎」

マザファッカーと叫ぶと同時にリーゼントは壁を殴りつけた。

それは主に、本間を恫喝する目的で行われた行為だったが、効果はきめんだった。

本間の股間下に小さな水たまりが出来た。

「この人は僕を誰かとまちがっている。それを教えなければ。誤解を正さなければ」

「ばばばばば僕じゃないんです」

「あ~~~~ん。なめてんのか、こら」

「だから、ちちち違っんです。だから僕じゃないんだってば」

「なんだてめえ、その口のききかたは」

本間のセリフがさらにリーゼント男の怒りに火をつけたようだった。

「違うんだ。僕じゃない。なんとかして分かってもらわないと」

本間は必死に抗弁しようとしたが、舌がくらげに刺されたように一切回らない。

「まただ」

ある一定以上の緊張状態に置かれると、本間の舌は働きを一切やめてしまうのだ。それはこれ以上被害を大きくしないための自衛手段のようでもあり、大脳に対するストライキのようにも思えた。

初めてそれが起こったのは小学三年生の時で、国語の教科書に出てくる、父、という発音をどうしてもスムーズに出来なかった。

突っかかりながら、ちちいち、なんてどもると、クラスで笑いが巻き起こり、本間はただ赤面して教師の着席の許可を待つしかなかった。

再び本読みに当てられた時、本間の舌はだんまりを決め込んだ。

それ以後も何度か同じような状態になり、その度に本間の自尊心は損耗していった。

「なにやってんの」

さつき本間が何度も開けようと試みて頓挫したドアから、すらっとした女性が出てきた。

「なんてきれいな女性だ。いや、きれいだななんて月並みな言葉じゃ足りない」

瓜実型の小さな顔に収まった切れ長の大きな瞳。ほどよく丸みを帯びた唇。欧米人のようにまっすぐに通った鼻梁。肩下まで伸びた艶のある黒髪。

「女王様」本間の頭に、むかし、映画で見たクレオパトラが浮かんだ。

「い、いや。輝美さんのストーカーがまたうるちよろしてたんで懲らしめてたんですよ」

リーゼントが頬を赤らめてクレオパトラに言った。

「いい加減にして。ストーカーはあんたでしょ。ちょっとデビット」

呼ばれて出てきたのは金髪でサングラスをした細身の若者だった。

「またてめえか」

言つやいなや、デビットのパンチがリーゼントの鼻っ柱を捉えた。

「ぶひえひえひえひえひえ」

リーゼントは後ろへぶっ飛び、そのまま動かなくなった。

「なんてかつこいいんだ」

本間は憧れを持ってデビットを見つめた。

視線に気づいたのかデビットが本間の方に近づいてきた。

「お礼を、お礼を言わなくては。それと後で果物でも、いや、ここは気を利かしてピックでも持っていけば仲良くしてもらえるかも」

「おまえもあいつの仲間か」

「へっ」

否定する間もなく、デビットのパンチが孤を描いて向かってきた。

バキッ！！

痛いと感じる前に本間は気を失って膝から崩れ落ちていった。

## Cold World (前書き)

保健室で目覚めた本間。 勃起!!

## Cold World

ここはどこだ。このベッドは、このパジャマは一体なんだ。

「あら、目が覚めたのね」

本間の目の前に白衣を着た女性が立っている。

「なかなか起きないから、心配しちゃったわよ」

一体この女性はなにを喋っているんだ。本間は周囲を見回した。

本がぎつしり詰まった棚に、薬品らしきものが並んだラック。ドアを開けてすぐのところに机と椅子が置かれ、本間が今寝ているベッドが窓際に配置されている。

この景色は見たことがある。それもなんども。そう！！保健室だ。

本間は中学生の一時期、俗に言う保健室登校児だった。

じゃあ、この人は森先生！？

やさしくて、いつも弱音を吐いた僕を励ましてくれた森先生。笑顔で包み込んでくれた森先生。でも僕はもう高校生。いやもう大学生のはず。

「森先生なんで大学に？ひょっとして僕を心配して来てくれたの」

本間はうれしさのあまり白衣の女性に抱きついた。

「先生、先生。うれしいよ、先生とまた会えるなんて」

本間は中学生の時のように森先生の胸に顔をうずめた。こうすると森先生は太い腕で本間を抱きしめ、頭をやさしく撫でてくれたのだ。

「ちょっと、やめなさい。だれか、だれか助けて」

「先生先生。なんで？昔みたいに良い子良い子してよ」

本間に細く長い手が伸び、本間の体は強い力でベッドに叩きつけられた。

「なにやってんだよ。糞ボウズ」

彫りの深い長身の若者が本間を見下ろしている。

この人は・・・デビット！！

あ、あああああああああああああああああああああ  
あああああ

本間は全てを思い出した。殴られるまでの一部始終をはつきりくつきりと。

じゃあ、森先生はなんで。

床に座り込み、震えている白衣の女性は森先生・・・ではない。それは見たことない女性若い女性だった。

わわわわわわ

おわわわわっわわわわっわあわわっわわわわっ

僕はなんてことを。本間は羞恥心やら罪悪感やら性的興奮やらでパニックに陥った。

「違うんで。ちいちちちちち違います。あ、ああああああ、いやああああああ」

「おい、落ち着けや」

本間の頬に張り手が飛んできた。

鋭い痛みで本間は我に返った。

「ああ、すいませんでした」

本間はベッドに額を擦りつけんばかりに頭を下げた。

「なんでお前があやまんだよ。あやまらなきゃいけないのはこっちだぜ」

「いえ、とんでもありません」

本間は背筋を正し、恐縮した。

「本間だろ。本間史明。臨床心理学科一年。見学の電話くれたのお前だろ」

デビットは本間の学生証を振りながら言った。

「勝手に財布開けて見ちまった。ごめんな。まじでやばかったら親とかに連絡しなきゃいけないからさ」

「すみません。ありがとうございます」

本間は再び深く頭を下げた。

「だからそういうのいいっての。悪いのは俺なんだから。詫びといてちゃんだけどさ、今度サークルで飲み会があるんだよ。そこに来いよ。奢ってやる。んでみんなに紹介してやるよ」

本間は緊張で固くなり頷くしかなかった。

「ああ、後遅くなったけど、俺、ロックンロール研究会の部長やつてる福部芳郎っちゅうもんだからよろしく頼むわ」

そう言つて、デビットこと福部芳郎は部屋から出て行った。

かっこいい。かっこ良過ぎる。

本間は同性愛的恍惚感に浸った。

「あ、あの。具合よくなったんだったら、出て行ってもらえますか」  
怯えた目で白衣の女性が言った。

「ああ、すみませんでした」

そう言いながら本間は少し得意気になっていた。デビットが飲み会

に招待してくれた、その高揚感がある種の万能感を本間に与えていた。

僕が抱きしめたせいでこの女性はこんなに怯えている。

本間の中に眠っていたサディスティックな一面が芽を吹いた。

ポケットについた名札をちらりと覗くと、大友可奈子と書いてある。

「今すぐ出て行きますよ、大友さん」

大友可奈子の体がびくつと震えた。

それを見て、本間の中にえもいわれぬ快感が走った。

この女性は僕を恐れている。僕もデビットさんのようにかっこよく立ち去ろう。

見られていることを意識して部屋を出て行こうとする本間に大友可奈子が声をかけた。

「あの、パジャマは置いていってもらえますか。それとこれ」

大友の手には股間部分に大きな染みを作った本間のジーパンがあった。大友はそれを汚物でも扱うかのように親指と中指でつまんで本間に投げてよこした。

目の前の屈辱を契機として、本間を今まで支配していた強気の虫がどこかに雲散し、いつもの本間がねぐらに帰ってきた。

「あああ、すいません。ごめんなさい。今すぐ着替えます」

もたつき、転びそうになりながらズボンを脱ぐ本間。それを大友可奈子は、零下49度の瞳で見つめた。

Mr. Drunker (前書き)

酒乱ですいません。いや、むしろ生まれて来てすいません。酒が引き起こす悲劇。いや、むしろ喜劇。勃起。

## Mr. Drunker

「カンパニー」

各々が自分のジョッキ、またはグラスを近隣の人間とぶつけあう。

それは日本中で毎日見られる日常的な光景だが、本間にとってそれは未知の世界、未体験ゾーンだった。

居酒屋田吾作の個室二つをくつつけた空間に、ロックンロール研究会の部員と入部希望の新生、合わせて四十人がこったがえしている。

どうしたらいいんだ。

さすがの本間も、乾杯が互いの飲み物が入った容器をぶつけあつて敵意がないことを確かめ合う、催しのはじめに行われる行事だということは分かっている。

しかし頭で分かっているだけで、経験は皆無。どのぐらいの強さで、どのような表情で、なにより誰とやればいいのか皆目見当がつかない。

回りはほぼ全てが初対面。知っているのはロックンロール研究会の部長であるデビットこと福部芳郎と、クレオパトラのような風貌をしたきれいな女性だけ。

ああ、どうしたらいいんだ。

本間はレッドツェッペリンのライブを追いかけたドキュメントDVDを思い出した。

そこでジミーページは長い腕を振り上げるようにして、グラスをにかけていた。

あれを真似しよう。

本間は短い腕を精一杯伸ばして、シャウトした。

「カンペエーイ」

決まった。初めての乾杯にしては上出来。いや、かなり才能を感じさせるものだったのではないだろうか。

周囲を見回す。みんなが安然とした表情で見ていた。

「いまさら乾杯って。さっきやったじゃん。しかもなにかっこつけてんの」

本間の隣に座っている太めの女が誰にともなく呟いた。

「なんで腕振り上げてるんだよ」「ロックスター気取りかよ」

居酒屋田吾作の個室に嘲笑が渦巻いた。

ま、またやってしまった。

本間は赤らんでいく顔を止めることは出来なかった。

「だっせえ」「なに考えてんだよ」「空気読めよ」「俺の靴舐めろよ」「うんこたれが」「糞野郎と酒なんて飲みたくねえよ」

虚実入り混じった声が本間の鼓膜に襲いかかる。

ああ、もう駄目だ。逃げよう。席を立とうとした本間の肩をデビットの手が押し戻した。

「こいつおもしれえだろ。俺のダチなんだ。よろしく頼むよ」

デビットの一声で嘲笑。ピタッとが止んだ。気がした。

さすがは部長だ。すごいや。

本間は潤んだ瞳でデビットを見つめた。

「じゃあ、今日は新人生歓迎会ってことだから自己紹介してこうか。まず俺から福部芳郎。部長やってます。後、the maraca ってバンドでベース弾いてます。よろしく」

デビットが立ち上がって言うと、歓声と拍手が同時に沸き起こった。

「じゃあ次は・・・おまえから行けよ。おまえから順番にさ」

デビットが指したのはクレオパトラだった。クレオパトラはめんどくさそうに立ち上がり

「白井忍です。デビットと同じバンドでボーカルやってます。ちなみにデビットってのは部長のことね。デビットボウイに似てるから」

「付き合ってるんですか？」

いかにも軽薄そうな茶髪がアホ声で言った。

その問いに白井はフツと笑って、「秘密」とだけ答えて座った。

再び歓声と拍手が部屋を埋める。「じゃあ、次は俺だね。俺は……」

部員が順に自己紹介をしていく。しかし、本間の耳には一切入らなかった。

やっぱり二人は付き合っているのか。いや、でも秘密って言った。付き合ってたなら秘密にする必要なんてないんじゃないか。でも、付き合っていないのなら、なんで秘密なんて疑いを誘うようなこと言うんだ。うー……、分からない。

本間は目の前にある飲み物を飲んだ。それは初めて本間の体内にアルコールが入った瞬間であつたが、本間はそれがアルコールであると気づかなかつた。それほどに本間の心は乱れていた。

別に白井さんとデビットさんが付き合ってたって関係ないじゃないか。僕にはなにも、なにも関係ない。なのに、なのに、なんでこんなに苦しいんだ。

本間は目の前にある、余分に注文してあつた生ジョッキやカクテルを飲みまくつた。

なんだよ。ちくしょう。なにがデビットだよ。ふざけやがって。俺様の顔をぶん殴りやがって。

中生三杯、ジントニツク二杯は本間の酒乱の血を呼び覚ますのに十分な量だった。

自己紹介は既に新人生に回っており、さつき白井に付き合ってるのかと問うた茶髪がにやけ面で発言していた。

「えーと玉口裕也です。趣味は・・・ってか音楽ですよ。このサークル入ってるんだから。出身は神奈川県です。ちなみに今フリーなんで彼女募集中です。すっげ大事にするんでお願いします。ちなみに年上好きっす。ぶっちゃけ白井さんとかチョータイプっす。好きな音楽は、DR、とか、あつ、ドラゴンアッシュのことっす。あと、オレンジレンジとか、B・Zなんか結構聞きます。よろしく！」

歓声、拍手。それにはやしたてるような口笛が響いた。

「つまんねーこと言ってるんじゃないよ」

本間の口から発せられた重低音が明るい空気を引き裂いた。

「なにがドラゴンアッシュだ。なにがオレンジレンジだ。なにがB  
Zだよ。しょっぺえんだよ、てめえら。男ならハードロックを聞  
け！！レッドツエッペリンを聞けええええええええええ」

うおおおおおおおお

おおおおおお

本間は目の前の長テーブルをひっくり返した。

女の子の悲鳴があがる。

「キヤアー。ワタシのフレッシュサラダが」

「そんなもん俺がもつとフレッシュにしてやる」

そう言うとは間間はパンツとズボンを同時に下ろしそのサラダの上に大便をひねり出した。

きゃああああ うおおおおおお おええええええ

本間は暴れまくった。自分がひねり出した糞を両手に持ち、女、男、かまわずぶつけまくった。

居酒屋田吾作の個室は狂乱に包まれた。本間にとってそこはウッドストックだった。

「おめえいい加減にしろよ」

デビットは本間の胸倉を掴んだ。本間はその手を逆に引き寄せ、頭突き一発。デビットは意識を失い、その場に倒れこんだ。

そのデビットを本間は抱えあげ、イングヴェイマルムステーンばりにギターに見立てて振り回した。

「オーイエス、オーイエス!!」

デビットのズボンを下ろし、チンコをトレモロアームに見立てて上下に動かす。

「イエーイー!! イャーーーーーーオ!!」

デビットは何度も振り回されたため、口から泡を吹いている。

「うおおおおお。一晚中いくぜええ！！っておわあああ」

永遠に続くかと思われた狂乱は、元ラグビー部の居酒屋店員永田のタックル一発であっけなく終焉した。本間は頭を打ち気を失っている。もちろん糞はついたままだ。

この事件は四月の悪夢として長く語り継がれることになる。

ロックンロール研究会の恥部として

伝説のバンドの幕開けとして

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0178f/>

---

Physical Graffiti

2010年10月31日04時19分発行